

「パンとサーカス」。二世紀前半、古代ローマ時代に活躍した風刺詩人、ユウエナリスが詩編の中で使った有名な言葉だ。住民にパンを与え、サーカス（娯楽）に熱中させれば、政治的関心は低くなり、統治しやすくなる考えた当時の皇帝たちを揶揄した。

今も愚民政策を示す言葉としてしばしば使われている。日本銀行の黒田東彦総裁が「異次元の金融緩和」と称した、「二年後にマネタリーベース（資金供給量）を約二倍の二七〇兆円にする」という日銀の金融緩和を「パン」、プロ野球の長嶋茂雄・元巨人監督と、巨人やヤンキースで活躍した松井秀喜氏への国民栄誉賞を「サーカス」とするとどうだろうか。安倍晋三首相の目論見が透けて見えてくるようだ。

◇ ◇

安倍首相の当面の目標は、今夏の参院選で圧勝し、政治基盤を強固にすることだ。マスコミ各社の四月の世論調査によると、内閣支持率は、朝日新聞六〇％、毎日新聞六六％、読売新聞七四％、日本経済新聞七六％、共同通信七二％。民主党政権の内閣は当初、支持率が高くて、その後は低下する一方だったが、安倍内閣の支持率は上昇カーブを描いている。安倍首相の「プロパガンダ」が奏功していると言える。

プロパガンダとはもともと、ローマ・カトリックが一七世紀に創設した、外国の伝道師を監督する「布教聖省」をさし、伝道師の養成機関を「プロパガンダ大学」と呼

## 安倍政権の「パンとサーカス」

んでいた。今は、マイナスイメージが強い。第二次世界大戦時、ドイツ・ナチスのゲッペルスが主導した国際宣伝戦を「プロパガンダ」と呼んだように、ある政治的意図をもって宣伝し、大衆を誘導することを意味することが多い。

約八〇年前に米国で出版された『プロパガンダ教本』（エドワード・バーネイズ著、成甲書房）にはその手法が詳述されている。サブタイトルは「こんなにチョロい大衆の騙し方」とある。

レーガン米大統領が一九八〇年代に掲げた「レーガノミクス」をもじった「アベノミクス」もプロパガンダの一つだ。

アベノミクスで本当に国民の暮らしはよくなっているのだろうか。資金供給量を増やすことで、円安、株価高をもたらし、青息吐息だった日本経済を上向きにさせたとも見える。安倍首相は春闘時に、異例の賃上げを経済界に要請した。コンビ二など流通業界を中心に一部企業はそれに応じたものの、賃上げは正社員のみとところが多い。全国各地の店舗で実際に働くパートやアルバイトなどの非正規雇用者は対象外だ。

だが、連日、企業の黒字決算、株価高などが新聞やテレビなどで流されることで、自分の生活も良くなったと勘違いしてしまうのだろう。これもプロパガンダの故だ。

レーガノミクスでも、市場原理、民間活力を重視した自由主義経済政策を推進して好景気となり、国内外でもはやされた時

期があった。結果的には、米国は財政赤字と、対外債務の「双子の赤字」が生じ、その後遺症は今も続く。

◇ ◇

安倍首相は二〇〇六年九月、第一次安倍内閣で、「戦後レジーム（体制）の脱却」を掲げ、憲法改正を目指した。今夏の参院選で、憲法改正の手続きを定めた九六条改正の争点化を図るのは、その一里塚なのだろう。

対抗勢力は頼りない。民主党の一部や、共産党、社民党、労働団体、市民団体……。「憲法を守ろう」と声をそろえるものの、足並みはそろわない。メーデーの五月一日や憲法記念日の五月三日、各地で護憲派の集会が開かれ、声高に「憲法の危機」を訴えたが、護憲派の政党、団体が一堂に集まることはほとんどなく、メディアへの露出度、国民へのアピール度も弱かった。

なぜ一緒に行動できないのだろうか。主義主張で対立したり、主導権争いをしたりした過去の経緯や恩讐もあるだろう。それを言い訳にしたり、自らの利益を優先したりしてみても始まらない。対抗勢力がバラバラなことが安倍政権にとって何よりの「応援」なのだ。

かつて日本軍に対抗するため、中国の国民党と共産党が手を組んだ「国共合作」のような仕掛けができないか。今のままでは、安倍政権のプロパガンダに対抗することはできない。参院選の結果は見えている。 八洋▽